



今月のことば

令和4年(2022)6月 <No.190>

## 娑婆の縁つきるとき

日本のフェミニズム運動を引っ張ってきた方で、東京大学名誉教授を務める上野千鶴子さん。10年ほど前に『おひとりさまの老後』という本を書き、ベストセラーとなりました。

家族のいない者にとっての、死との向き合い方や介護を受けるにあたっての心構え十ヶ条など、軽やかな筆致で「ひとり」を生きる知恵をつづられています。



**歳をとるとは、自分の弱さを認めるということだ。**毅然としていたり、凜としていたり、気骨のあるお年寄りというのはたしかにいらっしゃるが、そのまねが自分にできるとは思えない。病気で苦しめば痛みにびいびい泣きそうだし、死期を宣告されれば取り乱しそうだ。

わたしの父は医者で、自分が治療の手だてのない末期がんの患者であることを知っていたが、死の床で動揺をくりかえし、ちっとも死の準備なんかできていなかった。それがふつうの人間だろう。父の介護に際して、友人、知人の介護経験をさんざん聞いたが、りっぱな人間のりっぱな死に方は、いくら聞いてもなんの参考にもならなかった。「そんなひともいるでしょうね」という感じだ。万人がそのような毅然とした死を迎えるわけではない。…人間は弱い。動揺する。昨日考えたことを、今日になって翻すこともある。

『おひとりさまの老後』上野千鶴子 著より

実際、死に臨んで平静でいられる人の方が少ないと思います。「仏教の教えを聞いていたから」とか「人の死にたくさん立ち会ってきたから」ということは、あまり役に立たないと考えた方が良さそうです。なにせ自分自身の死は、初めての体験だからです。私も、まったく自信がありません。私たちの宗祖・親鸞聖人のことばに、次のようなものがあります。



「苦しく悩みの尽きないこの世(娑婆)であるのに、なかなか捨てがたいものです。苦悩から解放されると言われても、安楽の浄土を恋しく思うことができません。それは、自分自身の煩惱がなせる業です。私たちは、名残惜しく思いながらも娑婆の縁つき、力なく命終えていかねばならなくなってから、お浄土に参らせていただきますよ。」(『歎異抄』より 住職意訳)

親鸞聖人も、「自分は煩惱のせいで生にしがみつこうとするだろう」とおっしゃいます。そしてそうした人間の弱さに寄り添ってくれるのが、阿弥陀如来だと喜ばれました。

「急いでお浄土参りをしたからしない者をこそ、ことに憐れんでくださるのが阿弥陀さまです。これにつけても、いよいよ阿弥陀さまの大悲の願いは頼もしく、私がお浄土へ往生し、覚りを得て仏と成ることは間違いないと思えるのです。」

私たちも最後まで生にしがみつきのながら、お念仏と共に娑婆の命をまっとうし、ゆっくりとお浄土に参らせていただきますよ。



慧日山 真光寺